

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第3回 日本人の国民性はどのように形成されたか

1. 始めに

本シリーズの第一回と、第二回で、日本人は、子供のころだれでも持っている母に対する「甘え」が、大人になっても持ち続けること、社会に出て、家族類似の集団、保護と依存、もたれあいの集団を形成すること、この集団は、外に排他的であるが、その中では、親子類似のタテの秩序を形成することを指摘した。

タテ秩序は、中根千枝先生によれば、世界に例がないとのこと。では、この極端に日本的な国民性はどこから来たのであるうか。それを確認できれば、これに対する対策がみえてくるはずだ。

2. 第一の理由―民族抗争が無かったこと

日本人の国民性を作りあげた第一の最も重要な理由は、日本が島国で異民族の進入が無く、かつ深刻な民族抗争も無かったということだ。

大陸諸国での民族同士の抗争はさまざま。負ければ皆殺しか奴隷あるいは放逐だ。人類の歴史の中で、今までどれだけの民族が滅亡し、あるいは大移動を余儀なくされたことか。民族の抗争の激しいところでは、生

き抜くためには、とにかく独り立ちさせるようにする必要がある。親の責任は、親がいなくても独りで生きていけるよう、個人として逞しく育てることだ。親離れ、子離れは絶対の条件だ。大陸諸国は、必然的に個人主義社会となる。他方、日本は、そのような必要は全くない。親離れ、子離れすることなく、保護と依存の関係は生涯続く。その結果、子供の母親への甘えは生涯残存することになる。

チグリス、ユーフラテス川流域、黄金の三角地帯。人類最初の文明を生んだ地域であるが、ここでの民族の争いはことさらに激しかった。今も、イスラエル、パレスティナの抗争は激しい。イスラエルを支持するアメリカは、イスラエルのテロの対象だ。中国も民族抗争は激しい。あの万里の長城は、北方民族の侵入を防ぐためのものだ。ところが秦の始皇帝以降の統一王朝のなかで漢人が同じ漢人の王朝を何回持てただろうか。漢、宋、明のわずか3王朝にすぎない。20世紀まで続いた清は満州族の王朝。また、中国での王朝交代の戦は激しく、その激しい混乱の中で人口は3分の1まで減るという。

政権が安定してもとに戻るが、

再び世の中が大混乱して3分の1に減る。この繰り返しだが中国の歴史だ。中国人が遅しいのもうなずける。

高校時代の世界史の授業を思い出してほしい。ヨーロッパ史は、まるで戦争の歴史だ。100年戦争まで登場する。

タイは日本と同じく王朝をいただく。日本人は、日本と同じように昔からタイに王朝があったと思いがちであるが、実は違う。

タイ民族はもともと雲南省にいたが民族移動して今のタイの地にたどり着いたのが13世紀。アユタヤ王朝などを経て、今の王朝ラタナコーシン王朝は、1782年に成立したにすぎない。

次に海外旅行をするとき、農村のあり方に注目していただきたい。日本の農村は農家が点在している。耕作の便宜から、自分のうちに近いところに家を建てるから点在するのは当然だ。ところが、大陸諸国では、どこへいってもムラは集住している。農地から遠ざかっても集住するのだ。耕作に不便でも、敵の侵入に対し、そうしないと滅びてしまうからだ。

3. 第二の理由―米作の適地

日本の夏は、高温多湿で農耕に適している。土壌は豊か。そして、米という効率の良い穀物を栽培する。その結果、自給率はきわめて高く、ムラは多くの人を養える。

地中海は、全く逆。夏は乾燥し、土壌は豊かでなく岩だらけ。古代の都市国家は、すぐ人口過剰になった。古代ギリシャもその典型。穀物をエジプトやメソポタミアから輸入したが、代金支払いのため、現金収入となるぶどう酒やつばを作った。商工業が発達し、地中海は交易路となった。それでも足りず、植民都市をあちこちにつくった。

日本は、農耕に適していた分自給率が高く商工業は発達しなかった。日本海も、東シナ海も大陸から隔絶する海であり、地中海のような交易のための交通路とはならなかった。その分異民族の侵入も防ぐことができた。閉鎖的なムラが形成された。

ここでは生涯、狭いコミュニティで同じ人間と付き合う。皆と違うことをやれば目立つ。閉鎖社会では、皆と違うことをするということは最も嫌われる。村人は周りの目を気にしながら、人と違うことを避けて生活することとなる。争いも避けられる。閉鎖的で人の移動が極端に少な

いムラでは、勤勉で従順であることが何よりも大事。能力や実績などは邪魔。リーダーは調整型で十分。その結果、年齢や格差を基礎としたタテ社会が形成された。

中国なども農耕の適地であったが異民族の侵入を常に受け、生涯同じ人々と生きていくような平和な状況にはなかった。何時住居から放逐されるか分からない、厳しい世界であった。その結果、国民性は日本人とは全く異なることとなった。

4. 第3の理由—大規模な治水が不要

メソポタミア、エジプト、中国、インドスという4大文明発祥の地は、どれも大河の流域。毎年大規模な洪水が発生し、大規模な治水が必要のため、巨大な権力がそれを可能にした。

日本は、川は短く大規模の治水は不要であった。最大の島である本州も細長く、どの地点をとつても海までの距離は短い。川の水量は一年中豊か。治水は原則的に村単位で十分であった。治水がムラ単位と言うことは重要だ。経済基盤、生活基盤がムラ単位だと言うことだ。しかも、自給率はきわめて高い。非常に密度の高い共同体となる。

閉鎖性の高い独自の国民性が形成されることとなった。

5. 日本人はどこへ向かうか

ちょっと前まで、日本人の80%以上はムラに住んでいた。このムラという、平和で自給率が高く人の移動のないコミュニティのなかで、日本人に大人になっても「甘え」が残り、排他的な集団性と独特のタテ社会が形成されたことは今述べた。

ところが、今や日本人の80%以上は都市生活だ。しかも、諸外国との激しい競争にさらされている。平和で排他的なムラの原理が通用するわけがない。にもかかわらず、ムラの原理にしがみつかざるを得ないのが今の日本人の悲劇だ。

こういうと、この国民性で、高度経済成長を達成したではないかとの反論がある。しかし、この成功体験が今の日本人を苦しめていると言いたい。

高度経済成長時代は、追いつけ、追い越せ。目標はみな共通、強いリーダーは不要。アイディアは外から買えばよい。ムラがカイシャとなり終身雇用と年功序列、まじめさと勤勉さで日本人は成功した。しかし、いまや日本は発展途上国でない。成熟

した先進国としては、多様な価値観の中、自ら進むべき道を見出さなければならぬ。昔の成功体験はむしろ弊害だ。



金子博人
(かねこ ひろひと)
金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)修了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院。日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。